



この人を たずねて

広島大学大学院教育学研究科教授

森 敏昭氏

インタビュー
守谷 順



Profile — もり としあき

1976年、広島大学大学院教育学研究科博士課程後期中途退学。福岡教育大学助手・講師、広島大学教育学部福山分校講師・助教授を経て現職。文学博士。専門は認知心理学、教育心理学。主な著書は、『よくわかる学校教育心理学』（共編著、ミネルヴァ書房）、『認知心理学キーワード』（共編著、有斐閣）など。

■ 森先生へのインタビュー

——現在関心をお持ちの研究テーマについて教えてください。

心理学を実際の教育現場に応用することに関心があります。現場に出てみると、教育心理が実践からは遠いことに気づかされます。そもそも心理学と教育現場では扱っている言葉が違いますので、専門用語のままでは通じません。翻訳が必要なわけです。また、現場では理論を必要としていることがわかりました。心理学にはさまざまな理論があるわけですが、その多くはグラウンド・セオリーです。しかし、実践が必要とされているものは、より具体的で現場で役に立つ、フィールドに根づいた理論（グラウンデッド・セオリー）なのです。教育心理には理路整然とした洗練された論文はありますが、現場の先生が読んで現場に活かせるかという、かなり難しい。実際に現場に立ち、現場で何が必要とされているか知ることが重要だと思います。

心理と教育現場での違いが見え

る一方、研究するのも授業を作るのも構造は一緒であることに気づかされます。授業だとどのように進めていくか指導案をたてますが、これは実験計画とやり方は同じです。具体的にどのような授業を行うかは研究方法、子どもたちがどのような反応をしたかは研究結果であり、授業の振り返りが考察になります。根っこの部分は一緒です。

——現在のテーマに辿りついた経緯をお聞かせ願えますか。

40代前半までは、実験室での記憶研究といった基礎的な研究をしていました。残りの研究者人生も同じことを繰り返すには気持ちがのらず、何をするかじっくり考えようと悶々としていた頃に転機が訪れました。47歳のときでした。新しく理論と実践を統合した学習開発の講座を立ち上げることになり、当時の研究科長から3年の約束で来てくれないかと声を掛けられたのです。新しい講座なので不安もありました。しかし、心理学を閉じた世界からより開かれたものへ、教育学などを統合し

た新しい学習、教育の改善に活かされる学習を開発しようという気持ちで臨みました。

——転機が訪れる以前について、今振り返るとどのように思われますか。

30代まで心理学の研究の世界に閉じていました。ただひたすら論文を読んで書いてという生活で、当時は研究とはそういうものだと考えていました。業績がないと競争をくぐりぬけていけない、飯が食えない。周りのみんながライバルだったので、大変だし孤独であったと思います。

しかし、その頃に培った技術があるからこそ、今現場でも認められています。理論を構築するスキルや実験の腕を磨く必要はあり、それは財産となります。プロとして専門的スキルを身につけることは、研究者として乗り越えなければならない壁だと思います。しかし、それで閉じずに視野を広げることが大事なのだと思います。

——心理学にとって必要なこととは何でしょうか。

心理学はブレンドだと思います。いろいろな分野をつなげ、統合することができるのが強みです。一つのことを突き詰めすぎても、他の分野、例えば医学や工学などのプロフェッショナルにはかなわない。うまいバランス感覚が大事なのだと思います。

そのためには、フィールドを広げることが必要です。そして、研究結果をもっと外に発信すべきです。心理学が役に立つとわかってもらえれば、さまざまな分野に入り込んでいけます。外のフィールドに発信すれば反応が得られ、そこで理論を鍛え直せます。バックグラウンドは違っても、同じフィールドで議論することに意味があります。そこでは上下の隔てはなく、お互いにとって得るものがあるとすればその関係は継続しま

す。多くの学問をつなげる学際性 (interdiscipline), それが心理学の強みだと思います。

——では、研究者にとって必要なこととは何でしょう。

研究者として必要なものは創造性 (creative) です。そのためには、常に他の分野に興味をもつこと (curious), 批判的な精神で物事を考え (critical), 常に新しいことにチャレンジすること (challenge) が大事だと思います。新しい内容を理解するのは難しくても、話を聞くだけでも十分です。例えば、今、教育現場で何が起きているのか、どういうことが問題になっているのか、研究はしなくても関心・興味を持つことが大切です。そうすれば、すぐに現場に行かなくても思考実験ができます。

理論に則った論理的思考で問題を考え俯瞰することは、心理学の発展のためにも絶対に必要です。その一方で、具体的な問題に触れることを繰り返し行う必要があります。何が問題であるのか広い視野で取り組むことが重要です。

——最後にぜひ若い研究者にメッセージを。

研究に必要なのは、常に続けることです。「前方仰角 15°で止まらず歩む」とよく言っています。45°の坂を駆け上るのはつらくて続かないので、ゆるやかな坂を歩き続ける。一つのテーマを少なくとも 10 年続けることが大事だと思います。続けることで今まで見えていた景色が変わり、気分も変わりますので。

また、国際標準で世界に目を向けることが大事です。ただ世界でなされていることを取り入れるだけではなく、オリジナリティのある、独創的な研究を発信する必要があります。そうすることで世界からも認められます。

■インタビューの自己紹介

インタビューを行った感想

研究には、テーマの継続と新たな分野への挑戦という二つの重要な要素があることを再確認しました。研究を始めると一つの実験から明確なことは言えないことを実感します。実験をするたび新たな疑問がわき、それらを一つひとつ解決する必要があります。ただ、自分に無理はさせたくないなので、前方仰角 15°を歩む気持ちで研究を続けたいと改めて思いました。遊ぶときは遊ぶ。心理学は面白いもので、遊んでいるとインスピレーションが湧いてくることがあると思います。……もちろんそのために遊ぶというのは、本末転倒なのではありません。

また、転機はいつ訪れるのかわからないので、大事にしたいです。実際、僕自身もともと理系でしたが、さまざまな授業や人の話の影響で心理学を専攻するに至りました。チャンスがあれば、とりあえずやってみる。何事もやってから後悔したいので。ある程度は流れに身を任せ、今いる環境を最大限楽しんで研究を続けられればと思います。

今、どのような関心をもって心理学の研究に取り組んでいるか

社会不安の認知メカニズムの解明に関心があります。例えば、不安の強い人はネガティブな情報に注意を向けやすいこと (注意バイアス) が 20～30 年ほど前から知られています。最近では、ネガティブな刺激に注意を向けないよう訓練することで不安を低下させる

臨床応用にまで発展しています。しかし、注意バイアスのメカニズムが明確になったとは言い難いのが僕の印象です。そこを明らかにしたいと思っています。

どのような研究に挑戦してみたいか

洗いざらい不安の認知メカニズムを明らかにしたいというのが一つです。不安者に見られるネガティブな認知は十分明らかにされたので、次の一步に進むべきだと思います。例えば、注意バイアスは情動刺激に対する高不安者の過剰な評価によると説明されてきましたが、最近の研究では情動処理を含まない認知メカニズムにも問題があることがわかってきました。これは認知心理学の新しい実験方法を取り入れた結果、わかったことです。固定観念にとらわれることなく、新しい方法を次々に取り入れたいです。

モデルを提唱することも大事です。研究の発展には、極力シンプルでわかりやすく汎用性のあるモデルを示す必要があると思います。その一方で、話を単純化すればするほど現実の結果と細かい違いが生じてくるでしょう。両者をどうバランス良く対処するか、それが課題だと思います。

とは言うものの、研究を続ければ景色も変わるでしょうし、出会いで変わるのも悪くないかなと思います。自分の知らなかったことを知れることほど楽しいことはないですし、頑なになるのではなく新しい考えを取り入れるほうが好きです。



Profile — もりや じゅん

2005 年、東京大学教養学部生命・認知科学科卒業。2010 年、東京大学大学院総合文化研究科 広域科学専攻博士課程修了。学術博士。専門は臨床心理学、認知心理学。現在は広島大学大学院総合科学研究科杉浦研究室に在籍し、日本学術振興会特別研究員 (SPD)。